琉球大学学術リポジトリ

2.
小学校3年生を対象とする事例　－課外授業：大嶺海岸－

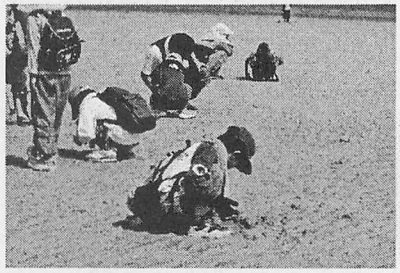
メタデータ	言語:
	出版者: 島袋純
	公開日: 2012-08-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤井, 晴彦, 鹿谷, 麻夕
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25057

Ⅱ．小学校３年生を対象とする事例　―課外授業：大嶺海岸―

エコビジョンおきなわ　藤井晴彦
しかたに自然案内　　鹿谷麻夕

境教育学野外観察授業５月19日土曜日午後２時～５時
ゲストスピーカ：鹿谷麻夕（しかたに自然案内）、
藤井晴彦(エコビジョンおきなわ)、
沖縄自治研究会研究スタッフ：前城充、大宜見長徳、
新田繁睦
特別参加：長田英己（気候アクションセンター）

干潟観察会(しかたに自然案内)

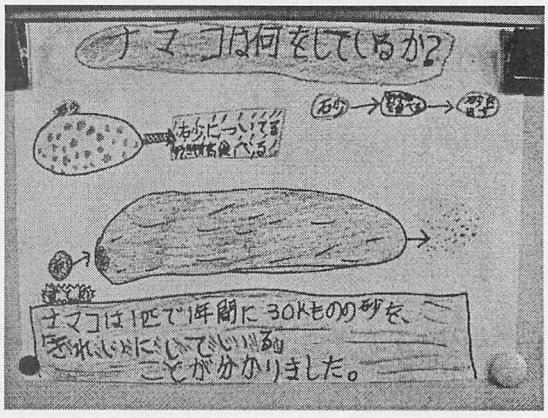


小学校３年生の授業を担当している鹿谷及び藤井両氏に、小学校３年生に対する授業と同じ授業を、環境教育学の受講学生（15名）にしていただいた。

まず、干潟に入る前に、服装、行動上の注意があり、次ぎに危険な生物の種類を写真をもとに説明していただいた。面白い生物、興味関心のあるものが見つかったら自由に質問をすること、また、時々講師の方で気がついた生物等があれば、その場で教えてあげることなどが伝達され、実際に干潟に入った。

小学校３年生の環境教育は、自然に興味関心を持つ、自然に親しむが第一の目的であり、大学生に対する環境教育学の授業でもその意図は伝わった。

自由研究発表会
知りたいこともっとたくさん



平成17年度から始めた３年生の環境教育の一つで、鹿谷麻夕、法一さんご夫妻と理学博士の藤井晴彦さんの協力で、干潟観察会を実施しています。那覇空港の横にある大嶺干潟に行って、干潟の生き物調べをします。１クラスに１人説明者がつくようにしています。干潟観察会を通して子ども達がその後、調べ学習後の発表会で３年生のあるグループが「ナマコは何をしているのか」というは発表をしていました。ベビーバスの中に30kgの砂を入れてきて、「みなさん、これは何か分かりますか」と問いかけて、プレゼンテーションを始め、ナマコ１匹が１年間に30kgの砂をキレイにしているというのをつきとめたという発表をしていました。汚れた有機物のついた砂を口から入れて、浄化して出す。これを１年繰り返して30kgの砂をキレイにしているということを発表していました。このようなに体験学習から調べ学習に移り、面白いプレゼンテーションをおこなっていました。(横山氏の報告より)

３学年担当教諭へのインタビュー

聞き手：島袋純（教育学部教授）、島袋裕介（教育学部４年次）、大宜見洋文（沖縄自治研究会メンバー）

島袋：琉球大学の教育学部で環境教育学という授業がありまして、そこで、環境教育が実際にどのように取り組まれているかということで、沖縄で一番取り組みが進んでいる事例ということで、宇栄原小学校の事例を紹介するという授業を組んでいます。宇栄原小学校の特徴は民間校長の横山先生と、それから NPO の方々が授業のサポートとして授業を担当されているということで、横山先生と NPO の方々にいろいろ話を聞いてきましたが、その中で、学生から、先生方の関わりがよく分からないっていう質問が出てきまして、それで、先生方からお話を伺って、学生間の理解を共有しようということと、もう一点は横山先生から、この授業を中心とした報告書をつくってほしいと依頼がありました。宇栄原小学校の環境教育についてです。それで報告書をつくるにあたって、先生方の関わっている部分も聞き取りを行って、まとめる必要がどうしてもあるものですから、それでご了解いただいて、夏休みになると先生方のご負担がちょっと軽くなるんで、夏休みにお願いしますっていうことになっていまして、それで今日、質問、聞き取りっていうふうになった次第です。何とぞご協力のほどよろしくお願いします。実際に報告書にまとめる場合は、先生方に添削や加筆修正等をお願いしてまとめたいと思っています。

では、始めたいと思います。各学年別にお願いしているのは、学年によって、NPO との関係、担当されている授業内容等がほとんど違うので、いっぺんに話を聞くことはできないなので、学年毎に聞くことにしています。３年生は、藤井さんと鹿谷さんですよね。こういう授業していますっていうことで、大嶺干潟の方に土曜日の干潮時間に合わせて、受講している学生全員と、一緒に行ってきました。目的、年間スケジュール等は、授業計画表見せていただいて分かってきたんですが、特に個々の授業をどういう目的で、どういう段取りで、いつ何を教えるかっていうことを、そして NPO をどう関わらせていくかっていう、授業のつくり方ですね。授業の組み立て方が、NPO の方々からはあんまり分からなかったので、その点についてまずお聞きしたいと思います。３年生の環境教育の授業はどういう感じでやりましたか。最初に横山先生から３年生はこういうテーマでしなさいとか、何かありましたか。

教諭 A：３年生の場合は理科が、生き物。特に植物やら昆虫やらの観察が１学期に入ってきます。それで（子どもたちが）虫博士になろうという大きなタイトルを決めて、そして身近にある生き物に興味・関心をもつことによって、自然が好きになっていく子どもをつくる、そういう子どもに育てようっていうことで、１学期は、NPO との関わりはあんまりなくて、近くに海軍壕公園がありますので、そこで虫取りをしました。その前に蝶のプリント学習的なことではありますけど、色塗りや食草調べとかいうことで、パソコンや図鑑等で調べて、そして今度は蝶から離れて、昆虫採取を親子でやる予定です。親子で、虫取りに行って、取ってきたセミやバッタとか、そういう昆虫を観察して、そこからまた不思議に思ったこととか、初めて分かったこと、体のつくりが調べたように本当にそうだ、とかね。それで今度はグループ分けして、セミグループ、なにグループっていうふうにつくって、詳しくセミとか、虫の身の周りだとか、そういうふうなのを子ども達が、どんな虫がいたかというのを挙げさせて、今度は自分達のグループがさらに詳しく調

べてみたい虫いる、って言ってから、カマキリグループ、なにグループって、それで４名グループつくったんです。さらに、４名の内の例えばこの子だったらカマキリの何とかね、それぞれのテーマを、私のテーマみたいなのに決めて。３年生ですので、大人が書くような素晴らしいものは書きませんけど、一学期は発表までもっていこうということで、とっても大急ぎではありました。まず、自分達で取ってきたものを調べて、さらに詳しく図鑑とかで調べる。それを自分、グループでまとめて発表する、というところまで。そして発表したら、聞く側は、初めて分かったこととか、他のグループが、例えばトンボには目がたくさんあるんだよ、というふうな発表をしていて、それが初めて分かったこととか、まとめて終わった。さらに、そこはできるかどうか、分からないですが、夏休みに入りますので、夏休みの自由研究はなるべくは生き物を調べてほしいっていうことで、親の関わりがないと子どもはどうしても無理なので、親にも自由研究調べはなるべく虫、あるいは植物でもいいよっていうことで。ホウセンカ等の観察もやりました。植物でも虫でも、自分なりにまとめてきてもらうようにしました。去年、結構子どもなりにおもしろいこと、例えばカブトムシがどれぐらい力あるかとか、自分達が図工でつくった車があるんですね。それにＣＤをどんどん重ねていってですね、何枚までカブトムシが引っ張りましたとか。発表が結構おもしろかったです。あとはセミの抜け殻を、写真で羽化していく時間で追って調べていった子もいました。これは去年でしたので、今年はちょっと分からないですが、そういうのをして、２学期は海の生き物を調べてみよう、という方向です。

～テープ裏面へ～

干潟観察に行く前に、大嶺海岸にいる生き物っていうことで市役所発行の、パンフレットがあってそれをコピーして、ナマコとかありますよね、それを子ども達に虫調べのときのようにグループをつくって、調べさせて、そして干潟に行って、「自分が調べたのがいるかねー」って。去年は行った時期が遅かったので、せっかく調べてもいなくてガッカリしている子もいたものですから、今年は NPO の方と相談して、これからの関わりは２学期干潟観察会の前に一度お会いして、子ども達が意欲的に干潟に行ってさらにその後も続くような形で、事前に学習したほうがいいのか、それとも行った後に詳しくやったほうがいいのか、そこらへんを相談しました。去年は、夏休みの自由研究の発表が終わった後に、まだよく分からない、調べてよく分からないことがあるっていうことで、虫博士の藤井先生に質問しようっていうことで、２時間取ってもらい、子ども達が質問し、藤井先生が答える形でやりました。どうしても子どもが質問することは、ちょっと「ん？」ということころもあり、これはもう少し工夫が必要かなと感じました。さらに２学期は、こちらに水鳥センターがありますので、去年は行かなかったものですから、今年は鳥、渡り鳥とかの観察も考えています。

島袋：それは漫湖のほうのですか。

教諭Ａ：そうです。歩いていける範囲なので、３年生はみんな歩いて行ったと聞いたので、それだったら、近くに、素晴らしい施設もありますので、そういうのも合わせて今度は計画していきたいなと思っています。実は、今年はどうするか、まだはっきり決まっていないです。去年は、学校に昆虫とかを呼ぶということで、普通の学校でもやっていることではあるのですが、お花とか、植物を、花を育てるだの、学校にはどんな食草があるか、とか、調べはしたけど、実際に

子どもはどんなものかよく分からない。だから、もう少し自分達でもっと学習して、校内に、ここに蝶が食べる食草があるよ、など見つけてから、昆虫とかを呼ぼうと思う。生命とはまだいかないですけど、そういうふうに校内の食草とかを、少し充実させたいかな。でも実際できるかどうかは。あとこれは今の話と離れますが、牛乳パック。牛乳パックは、資源として回収しています。どうにか生活に活かせないかっていうことで、一人ひとり牛乳パックで鉛筆立てをつくらせたら、子ども達は喜んではいました。

島袋：今、まだ決まっていないというのは、植生を調べるかどうかとかいう話ですか。普通の教科だったらその教える内容がほとんど決まっていますので、年次計画が事前につくれて、それをその通りにやっていけばいいじゃないですか。これは大雑把にしか決めることができなくて、しかも自転車操業的に、今の段階で子ども達はこのぐらいの認識だからこれができるかなって、去年はこうだったから今度はこうがいいかな、みたいな、実際の毎回の授業計画をつくるっていう時は３年生の担当の先生方が集まって、話し合いをしながら、指導案をつくっているのか、実際の授業の具体的な組み立て方法について聞かせてください。あと、もう一つは他の学年の先生方にも聞いたんですけど、理科のですね、教科を基盤にしてそこから発展させていくっていう姿が見えるのですが、やっぱりそれは基本的に、何て言うんですかね、とても導入しやすい。子ども達にとっても理解しやすい、先生達にとっても流れをつくりやすいっていう状況で、４年生はゴミの問題が社会科で 10 時間から 10 数時間あるので、それを基盤に発展させていくという形で、３年生の場合は生き物っていうもので、それを基盤に発展させていくのかな、っていう姿が見えるのですが、やはりそういう感じですか。

教諭 A：はい、そうですね。校長先生のほうからは、去年でしたかね。干潟に行くので、海岸とかの、汚れやゴミが生き物の、命を奪っているっていうことも、少し教えながらということで。それを含めながらやっていますけど、どうしても清掃活動っていのか、そこまではまだ３年生には無理ですね。本当はそこまでいきたいけど、要するに環境教育って言ったら「えっ、掃除？」みたいな。それではなくて、３年生の場合はまず生き物が好き、大好きみたいなところに焦点を絞ったほうがいいかな。それでいて、これが当たり前の何ていうの、自然の当たり前の姿を知るということが大事かなと思って。

島袋：これは先生方から提案されたのですか。

教諭 A：そうですね。校長先生からも親子でスクリーンするのもいいんじゃないですか、っていう声はあったのですが、もち帰って学年で考えた時にそこまで子どもが、やりはするはずだけど、子どもの心の中にどんなして残るかないっていうのが、一抹の不安があって、まだそこまで育てきれない、育ってないなと思ってね。そこらへんがテーマと言えばテーマになるんですけど。

島袋：これは基本的に大きなつくりっていいますか、１学期は昆虫中心に、２学期は海の生物、そういった大まかなテーマっていうのは、学年の先生方の話し合いでやっていくのですか？

教諭A：そうですね。あとは去年のものとかも参考にしながら、ここは変えよう、とか。ここは加えたほうがいい、とか。ただ今回は私が残ったものですから、要するに３年を２回やっているので。二人は今度初めて３年生やるんですね、他校から来たりとか。

大宜見：先生は、他校から来られた先生ですか。

教諭B：他校ではなくて、私は５年担当でした。

大宜見：５年から３年に移って学年の違いで、環境教育への取り組みの難しさってありますか。

教諭B：去年は「持続するエネルギー」っていうのでやったんですけど、やっぱり３年生はまだ環境っていうのにはちょっとほど遠いような気がします。だから今、教諭A先生がおっしゃったように、やっぱり身近な生き物を育てるのから始まって、環境っていうのはまだ３年生にとっては早いかな。

島袋：教諭C先生は、他校から移ってこられたので、　宇栄原小学校で環境教育、これから取り組むということですか。宇栄原小学校の取り組み方はかなり違うじゃないですか、環境教育に関する取り組みっていうのが他の学校と違うと思うのですが、戸惑いとかなかったですか。

教諭C：私自身も教員として学校現場に入るのは、まだ半年足らずなので、それは今も続いています。

島袋：全てが新しい感じですね。

挙諭C：はい、そうです。

島袋：環境教育やるよって、こういうテーマでやるよって校長先生がここでリーダーシップ発揮して実際にやろうって言っても、実際に現場で教育するのは先生方で、こういう話し合いを通して、自分達でやっぱりこれは、この環境教育はやるべき教育であって、しかも子ども達の教育にとって是非とも必要で、自分達が実際こうやるとしたら、今みたいに３年生であれば環境を楽しむ、環境を美しいと思う、そういう心を育てることが重要だという話し合いを通して主体的に自分達で取り組むっていう姿勢を身につけていくことがとても必要ですよね。そういった意識の転換っていうことは、例えば４年前横山先生が来た時に言っても、普通はなかなか浸透しないと思うんです。浸透していくプロセスっていうのは、学校内での軋轢だとか、あるいは理解が足りなかったりとか、軌道に乗るまでにいろんな苦労とかはなかったですか。

教諭A：３年目ですけど、１年目はちょっと私も戸惑いましたね、教員生活長いんですけどね。前の時は５年担当でしたけども、５年生の場合はNPOの方が、３年生の場合とはまた違って、担当はアースの会の方がほとんど中心になってなさっていたので、上手く自分がどうも消化でき

なくて、アースの会の方はその時に来ていろいろ、テーマが「食」だったんですけど、豆腐づくりをしたり、エコクッキングをしたりするけど、これらを繋げないといけませんよね。それを繋ぎきれないってところがあって、あの時は、輸入問題、日本はこういうふうな小麦とかを輸入しているということを伝えたいっていうのがあったけども、上手く伝えられなかったような雰囲気が、何て言えばいいんですかね。どのようにして繋げればいいかな、ってとても悩みました、教師としてね。ようするに一発花火みたいにして、子どもは「今日はゆし豆腐つくっておいしかった」で終わるところがあって。

島袋（裕）：ステップっていうか、繋ぎですよね。ただの一回毎の授業で、これがあるからこうなって、っていうのがなくて。

教諭A：そう、「先生、つぎは何つくるの」みたいな。なんか調理実習みたいな。アースの会はとっても一生懸命なさっているので、申し訳ないなっていう気持ちもあるし、自分がそれをこうもっていききれない、３年生はそういうのだったんです。３年生の場合は鹿谷さんとか藤井先生とかと何回か関わる中で、子ども達に不思議な発見とか、そういうのを教科とも抱き合わせながらやっていくっていう形で進めました。子どもが本当に育っているかどうかはまだちょっと、長い目で見ないとそれは分からないところではありますけどね。少し見通しではないけれども、こんなかなって気がしますね。あの時は１年目だったので、また今考えれば社会科の学習と繋げてやればできたでしょうけど、どうしてもどうして繋げたらいいのか。

島袋：なるほど。だけど、これを繋げていくのは校長先生にはできなくて、教員が主体的に繋げていくっていう意識がなければ。

教諭A：しかも、学年で一緒にやらないと。学年での総合だと思うので、そこがちょっと難しいかなって感じですね。

島袋：その苦労を重ねて、段々と、その学年毎の繋がり、時間的にも全部繋がるっていうふうな。

教諭A：たぶん繋がっていくと思うんですよ。ただ、他の学年が実はどんなふうなことをやっているのかよく分からないんですよ。

島袋（裕）：学年毎の情報を共有する場っていうのはないんですか。

教諭A：大まかに、私が主任なのですが、主任の先生達が集まって、それぞれのテーマとかそういうのをやりますけど、何て言うのかな、大まかなものしかなくて。

島袋（裕）：具体的な中身っていうか、そこまでは。

教諭A：そう。３年生だったらそこから総合がスタートですから、そんなに支障はないけど、た

ぶん５年だったら、この子達はどんなことをどこまで学べたか、１年目は特に、何をやったのって子どもに聞くけど、何か買い物ゲームしたよ、とか言ってね。ようするに話し合う…。

島袋（裕）：学年が上がるにあたっての、申し送りっていうか、そういったのが無かったっていうことですかね。

教諭Ａ：そうですね、あの時はね。今はまぁ学年単位…。

島袋：なるほど。これが、沖縄の他校に広がっていくとか、あるいはこれから宇栄原小学校でもずっと継続していく、そのためには、全然経験がない先生だけだったら無理かもしれませんが、ある程度フォーマット化っていうか、形式をカッチリしていかないと、これは他のところではできないですよね。例えば宇栄原小学校の取り組みを、宇栄原小学校だけでできたんだよということではなく、ある程度プログラム化するとか、何かしていかないと、継続って難しいかもしれないですね。

大宜見：教諭Ａ先生は３年目で、教諭Ｂ先生は２年目ですよね。子ども達の変化は感じますか。こういう授業を行ったおかげで、意識が変わってきているとか。逆にこれより他にもっといい方法があるのかなとか、そういう感覚が…。

教諭Ｂ：よく言われているのは、こまめに子ども達が家庭でも電気を消すとか、水道を確認するとか、そういうのはすごく顕著に表れているように思います。

大宜見：それは３年生ですか。

教諭Ａ：今度、転任してこられた保健の先生が、最初にやっぱりすごいと言っていましたね。電気をつけていたら、これ何でつけているの、って６年生の保健委員の子がバンバン消して歩いているって。最初はびっくりしたけど、言われたらそうだねって、換気扇まで、トイレの換気扇まで消すからすかんさって感じで。

島袋：臭うんですか。

教諭Ａ：はい、そういう話をなさっていたので。ここに長いこといたらあんまり気がつかないんだけど、たぶんいらした先生のほうがある程度子ども達のこういう行動に敏感なのかな、と感じましたね。

教諭Ｂ：環境教育ということで、日頃でも、私達自身もやっぱり気にするんですよ。給食後の牛乳パックを、水を溜めて、花にかけるとか、こういったものが、子ども達に習慣づいています。溜めた水は捨てないとか、ちょっとしたことですが。

島袋：６年生が１，２年生のところに来て、もったいない運動をやるとかがあるじゃないですか。この学年間の相互交流っていうことと、それから先輩の学年から後輩の学年に何か教え伝えるみたいな、そんな雰囲気っていうのが上手くできているんですかね。

教諭Ａ：そうですね、去年はありましたね。６年生がそれぞれの、低学年にグループに分かれて、節水だの節電だののやり方とかそういうことは、一時間かけて話をするってことをやってはいましたね。ただそれは、日常的に関わるっていう感じではないので。

島袋：３年生は地域の方々と昆虫取りに行くっていうことで、父兄と一緒に行くんですか。

教諭Ｂ：今回は、お父さんお母さんも一緒に、安全面も考慮して一緒に行きましたね。

島袋：これは一種の授業参観になるんですか。

教諭一同：学習参加って言いますね。そういう形で。

島袋：父兄の方にも一緒にきていただいて、こういう教育目的であるということを理解していただいて。

教諭Ａ：そうですね。干潟観察会の時もそうですよ。呼びかけて、学習参加っていうことで。去年もけっこういらっしゃっていました。

大宜見：これは、藤井さんと鹿谷さんに干潟で教えてもらった時は、あの時期が一番一年間でいいよっておっしゃっていまして。

教諭Ａ：５月ぐらいですよね。

大宜見：そうそう。一番引く時間が長くて、で昼間と。

島袋：かなり長い時間海にいて。４時間ぐらいですかね。

教諭Ａ：ずっと、浅瀬のところまでね。これもちょっと今回ネックになって、去年は実際 11 月に行ったんですよ。そしたら、いない、何にもいない、ってなって。今回もだから前がいいかなと思いながらも、ただいきなり海に行くっていうのがね、子ども達を引っぱりきれないんですよ。身近って言いながら、例えばこっちに虫いて、じゃあ海にもいるんじゃない、って。夏休みに海に行った、とか言って。貝殻拾った子もいたりしたら、じゃあどんな生き物がいるか知っていますか、みたいにして。やっぱりその前には動機づけですね。ようするに子どもが行く訳、ただ行ったら「おもしろかった、先生」で終わるので、動機づけをさせて行ったほうが、より鮮明に子どもは思って。どうしても２学期とか、９月に入ってから、夏休み明けのほうがいいんだけど、

でもそうなったら生き物が限られて、その前に、去年なんかも調べたのがいない。「先生いないよ、いないよ」ってから、「うーん、いないね」って言って。ということで、ちょっとガッカリしている子がいたので、そこらへんもやっぱりどうしてもネックになりますね。次年度はやっぱり１学期に、５月に行ったほうがいいかもしれないし、もう少し組み立てを変えるとか。だから、虫も、だけど７月にしかいないし。全部、毎日総合みたいな感じもね。

島袋：８月なると虫いなくなりますからね。

教諭Ａ：だからね。セミも全然聞こえなくなります。梅雨が明けてもすぐはいない。明けて1、2週間後ぐらい。タイミングが悪いというか。

島袋：季節もの。旬のものなんじゃないでしょうか。

島袋（裕）：さっき平川先生が、去年はこういうところがダメだったから今年はこうしようとか、振り返りっていうんですか。年度末にすると思うんですが、その時に藤井さん達は参加したりしていますか。

教諭Ａ：そういうのはやってないですね。私達だけですね。ただ、藤井先生達は博士に聞いてみよう、質問コーナーとか、あと干潟の時に、やっぱり遅いですね、っていうことで。干潟観察終わって反省会っていうか、やっぱり１１月はちょっと遅いですねって。もっと早い、今言ったみたいに５月がいいとの話し合いはしました。

島袋：そうですよね。学校の理科の生物っていう授業との絡みがあって、学校と NPO のその専門のちょうど旬の季節、必ずしも一致するわけではないですよね。お互い情報持ってないと難しいですよね。長い時間本当にありがとうございました。